

『消去』の語り手も、『惑乱』の領主も、遺産の寄贈というかたちで永遠の連鎖に終止符を打とうとする。最後の可能性は、閉鎖空間に留まりながら、永遠に反転運動をつづけること。祖型の永遠の反復は、ちょうど壁に掛かって子孫を睥睨する肖像画の位置を動かしてつづけるうちに、父の肖像画と母の肖像画が入れ替わるように、記憶は錯綜し、伝統の重荷から逃れることもできるのではあるまいか。

トーマス・マン再読

岡田浩平

クラウス・ハープレヒトの大著『Thomas Mann — Eine Biographie』の翻訳作業の過程で、久しぶりにマンの著作を読み返す。新しい発見がいろいろあるが、ここでは大戦後トーマス・マンが初めてドイツを訪問する経緯に触れてみたいと思う。

(1) この亡命作家の戦後最初のヨーロッパ訪問は、1947年5月のこと。チューリヒでの「国際ペンクラブ大会」に出席のためであった。しかしこの100日余りのヨーロッパ滞在期間中にマンはドイツの地に足を踏み入れようとしなかった。

亡命中のトーマス・マンと国内に留まった作家たちとの間で敗戦直後に始まった論争は、相互不信と怨念に満ち、感情的にひどくこじれた雰囲気をつくりだしていた。そこに「非ナチ化裁判」での指揮者フルトヴェングラーの発言。ナチス時代を自分（トーマス）とは正反対の生き方をした大物芸術家が、その行動を堂々と弁明しドイツ国内で広く共感と喝采をもって遇されている、という。マンにとって大いに腹をたて苛立ちを募らせる情報に違いなかった。彼は日記に「Furchtwängler」と書き込む。苛立ちと嘲笑のほどを窺わせる表記であった。訪問要請がしきりに来ていたにもかかわらず、ドイツ訪問は「時期尚早」と判断せざるをえなかった。

(2) 亡命後初めてのドイツ訪問は、1949年7月のこと。ゲーテ生誕200年記念行事への招待に応じる形のものであった。7月23日、バーゼルから列車でフランクフルトに向かう。出発日が近づくとトーマスはしきりに鼻血をだすようになる。医者診断では神経の緊張疲労が原因とのこと。出発当日も日記にみじかく「まるで戦地に赴くような気持ち」と書く。現地ではホテルでも市中でも常に四人の警官がトーマスの身辺警護に当たるような有り様。パウルス教会での記念講演を会場の外でスピーカーを通して聴いていた聴衆から帰り際に「また来て下さい!!」との勇気づけの言葉を投げかけられてほっとする。翌日にはミュンヘン。25年振りにみる町並みのすっかり破壊された光景を、トーマス夫妻は静かにそっと涙ぐみながら言葉もなく見つめていた、という。翌30日ニュルンベルクを通りバイロイトに向かう。バイロイトではホテルのオーナーが来客記念帳を出して、トーマスにも記念帳を求める。記念帳をめくると、ワグナーの祝祭劇の折に投宿した第三帝国のお歴々の名前がずらりと並んでいた。トーマスの顔に一瞬怒りの表情が浮かぶが、その怒りを抑

えて、白紙のページを数枚飛ばして自分の名前を書くことでどうかその場を凌いだ、という。

7月31日には ヴァイマル。東西冷戦の激化、「ベルリン封鎖」解除直後に当たっていたし、東西ドイツがそれぞれに国を造ろうとしていた時点での訪問であった。トーマス・マンは、「真の故郷は占領地区にも左右されない自由なドイツ語だとの思いでいる不偏不党の物書きが、今日ドイツの一体性を保証し代表してやらなかったとしたら、誰にそれがやれるというのか」と繰り返し主張して、ヴァイマル訪問をあえて実行したのであった。

トーマス・マンのヴァイマル訪問を東側ドイツは、国をあげて歓迎する。と同時に誕生目前の新生国家の承認のさきがけとして利用する。他方西側ドイツの人びとは、公開書簡などを通してトーマスのヴァイマル訪問に異義と批判を展開する。こうして16年振りにようやく実現したドイツ訪問も、トーマス・マンと生まれ故郷との相互不信やルサンチマンをまたもや増幅させるものとなってしまった。

Spitzenstücke. Weibliches Erzählen in Rilkes *Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge*

Christine IVANOVIC

„Gute Prosa“, so behauptet Rilke in seinem Vortrag *Moderne Lyrik* (1898), „ist nicht unbewußtes Gestehen, sondern bewußt hartes Ringen mit Stoff und Form, ernste Männerarbeit.“ Das Ersetzen der Opposition Lyrik – Prosa, die um 1900 ins Wanken geraten war, durch die Opposition „unbewußtes Gestehen“ – „harte Arbeit“, berührt zwar nur an der klischeehaften Oberfläche eine gängige geschlechtliche Zuschreibung. Die gender-Frage wandelt sich aber im Verlauf der Arbeit am *Malte* zu einem konstitutiven Modell. Die Spannung zwischen dem weiblichem und dem männlichen Pol bestimmt, das soll im Beitrag gezeigt werden, *maßgeblich* Rilkes Prosabuch. Sind in dieses Buch zahlreiche Reflexionen auf die Möglichkeiten und Grenzen ‚guter Prosa‘ eingelassen, so läßt sich dabei die schon lange zuvor entwickelte Verbindung von deren Problematisierung mit der gender-Perspektive nahezu durchgängig beobachten. Es zeigt sich, daß, in scheinbarem Gegensatz zu Rilkes früherem Diktum, Maltes *Aufzeichnungen* letztendlich einem über Weibliches bestimmten Paradigma gehorchen, das im Verlauf des *erzählten* Geschehens zunehmend als deren Präfiguration entdeckt wird. Gegen Ende der Aufzeichnungen wird Malte/Rilke gerade dem Begriff der „Arbeit“ den der Liebe zuordnen, und beide, Arbeit wie Liebe, bei den Frauen eher aufspüren als bei den Männern.